



絵師・伊藤若冲 (二)

地域史研究者  
三善貞司

## 五運の施しで往年の画力を復活

### 僧となり、画で人生を諭す

寛政1年(1789)火災で家屋から作品まで失った天才絵師伊藤若冲は、卒中(脳血管の障害)で倒れます。当時としては高齢の73歳のときです。

半身不随になって絶望のどん底にいた彼を、島之内(現・大阪市中央区)の自宅にひきとって世話をやいたのが、大坂の薬種商吉野五運でした。医師や薬師を総動員したばかりか、「な、お前さん。わしに鶏の絵描いてやると約束したやないか。死んだらあかん。約束を守れ」と責めたてます。つまり五運は若冲の画魂をゆさぶろうとしたのです。

風流を好んだ五運は、ありあまる財力にものをいわせ、外国から高価な書画骨董(こうちゆう)を集め、世にも珍しい動物や鳥魚の剥製(はくせい)を並べて人に見せ、びつくりさせるのを何よりも楽しみにしていました。

鶏を描いて日本一と言われた若冲です。いつしか病床から起きあがり、不自由な手で絵筆をにぎり、それらを熱心にスケッチするようになります。今でいうリハビリですね。これがいつしかふたたび絵を描く意欲をよみがえらせました。

ある日若冲は、  
「おかげさんでだいぶよくなりました。約束をはたしたいよて、なにを描いたらよろしい？」

とたずねます。それありがたいと喜んだ五運は、しばらく考えていましたが、「わしの檀那寺(そのこの和尚に帰依している寺のこと)の、ふすま絵をお頼みしましょうか」

と、頭を下げます。この檀那寺が西福寺(豊中市小曾根1丁目)です。若冲は五運に恩返しをしないと西福寺に泊まりこんで、すべての老いの情熱を注いで描きあげますが、これが今も同寺の秘蔵画「仙人掌群鶏図」です。数多い若冲の鶏絵の最高傑作ですので、少し説明しておきます。

縦177センチ、横92センチの大ぶすま6枚に、雌雄の親鳥10羽と雛鳥8羽が、浩然(わづらわしいこと)から解放され、のびのびしている様と描かれています。いずれも日本では見たことのないたくましい鶏です。精悍(せいかん)顔つきが鋭くいさましい(な表情と見事なとさか、大きくはねあげた尾、ダイナミックな動態(動きの変化)に美術評論家たちは、

「これはシシリー島(地中海に浮かぶ島)にいるシシリアン・バタコックと呼ばれる珍しい品種の鶏だ。しかも動きの瞬間を実に巧みにデフォルメ(芸術的に変形して描く)して

いる。すばらしい」

と絶賛しています。おそらく五運の剥製コレクションの一つでしょう。また画面左右の仙人掌（サボテン）も、当時はめつたにお目にかかれぬ植物でした。

すっかり満足した若冲は、これでわしの画業は終わったと大坂を離れ、石峰寺（京都市伏見区深草石峰寺山町）に移り、小さな庵を構えて黄檗宗（宇治万福寺住職隠元が広めた禅宗のひとつ）の修行に入ります。

雲水（修行僧）姿になった老いた若冲は、若い僧たちにまじって托鉢にも出るかたわら、無名の石工や心得のある信者を集めて下絵を描いて与え、多くの羅漢（悟りを得た修行僧のこと）像を彫らせます。

これが現在でも大変有名な「石峰寺五百羅漢」です。釈迦の誕生から涅槃（死亡）までを物語化した構想で、関連する菩薩（やがて仏になる修行者）や羅漢の群像が、境内狭しとばかりに散在したのですが、虚飾の全くない単純な、しかもさまざま表情のなかにそれぞれの人間性があふれている、なんともいえない石像群です。

長年の風雨にさらされたせいか今では丸みをおび、苔むして風化した姿はいつまで眺めていても飽きがくることはありません。とりわけ春雨や時雨に濡れたあとの眺めは格別で、若冲大好きのお勧め場所です。対峙（向かいあって動かない）していると、誰もが魂を奪われたような気分になるでしょう。

京の祇園情緒をテーマに舞妓さんたちの艶美な風情を歌って「紅燈の歌人」と呼ばれた吉井勇を、ご存知でしょう。彼は晩年放浪し、情痴を求めた夢から醒め、人間の哀感を感じみ詠んだ人生派に転向しています。そのころから熱烈な若冲ファンになっています。「我もまた落葉の上に寝ころびて羅漢の群れに入りぬべきかな」  
石峰寺五百羅漢をこう歌っています。

若冲は寛政12年（1800）84歳で病没しました。石峰寺に、「斗米庵若冲居士」と刻まれた墓碑が建っています。斗米庵とは、彼が絵に一桧、二桧と桧にお米を入れただけの値段をつけて、求める人たちに与えたことを意味します。桧に米が残っておれば、どんなに金品を積まれても断つたと伝えます。

なお西福寺の「仙人掌群鶏図」は、毎年11月3日だけ一般に公開されます。ただし当日雨天であれば、拝観できません。他の日は非公開です。



掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞